

教育研究業績書

2018年05月14日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：山口 晴美

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学	QOL リラクゼーション 看護技術 看護教育
学位	最終学歴
修士（保健学）	大阪大学医学部保健学科看護学専攻 卒業 大阪大学医学系研究科保健学専攻博士前期課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		
1. 学生委員として学生生活や集団活動への参加支援	2015年4月2017年3月	学生委員として、充実した学生生活となるように支援した。具体的には、SNSの使用方法や季節性感染症への対策や予防接種施行の支援、教員と学生の交流会の開催を行った。また、集団活動へ積極的に参加できるように支援した。具体的には、体育祭における集団演技への学生参加を支援し、学生の役割分担、演技構成、編曲、練習参加の付き添いといったアドバイザーの役割を担った。
2. 看護技術の学生の自己練習時の指導	2014年4月～現在	学生が看護技術を習得していくためには、授業時間外の自己練習が必須となる。学生が主体的に自己学習できるように自己練習日を設定し、適宜学生の質問対応や指導を行っている。
3. 学生委員として学生生活への支援	2014年4月2015年3月	学生委員として学生生活が円滑となるよう適宜実施する学生ガイダンスや、学生生活に関するアンケートの作成・実施・集計・分析を担当し、学生生活の支援活動を行う。
4. 基礎看護学分野の教員として、新入学生への健康面でのフォロー	2014年4月2015年3月	新入学生のうち健康面に不安を抱える学生に対して面談を行いフォローを実施
5. 実習病院責任教員として基礎看護学実習ⅠⅡを担当する	2014年4月2015年3月	実習病院先との調整や実習説明会の開催、健康問題を抱える学生との面談や各教員への周知といった実習運営を主担当として担い、学生の指導や成績の判定に加え非常勤の補助教員への指導やインシデント発生時の対応等を行う。
6. 大阪大学医学部保健学科にてティーチングアシスタントとして勤務	2009年4月2011年3月	主に生理学演習、解剖学見学実習、成人看護学演習を担当し、演習の補助や学生の指導を行う。

2 作成した教科書、教材		
1. 薬法に関する資料	2017年9月	基礎看護技術演習Ⅲの科目で使用使用する。2年生後期の診療の補助技術の前半で学習する科目である。生体への影響が大きく、目的と援助方法が一致しなくてはならない。また、そのためには看護師の的確な判断が求められる。解剖学・生理学の知識を確認しながら説明し、学生が根拠に基づいて援助を考えることが出来るように事例検討を行うなど工夫した。
2. 洗髪に関する講義・演習資料	2016年6月	基礎看護技術演習Ⅱの科目で使用使用する講義・演習資料を作成した。2年次前期の日常生活への援助技術の最終項目となる。湯を用いた援助であり、多くの道具を使用し、体位変換や体位の固定といったこれまでに学習してきた知識や技術を組み合わせる必要はない。また、病院実習の際に患者さんへ援助させて頂くことの多い技術である。以上を踏まえて、患者さんに実際に援助させて頂くことをイメージし、迅速にかつ的確な援助ができるよう、効率良く物品を配置・準備し患者さんの安楽を考えることが出来るよう作成した。
3. フィジカルアセスメント（消化器）に関する資料	2016年	フィジカルアセスメントは、問診・視診・聴診・打診・触診などを行い、患者さんの症状を把握・評価し、状態に即した対応を検討していく診察技術を学習する。消化器は嚥下から消化、吸収、排泄までと見るべき箇所が多い。学生自身がベアをなり実際に互いに観察を行いながら進行する授業形態とし、知識と手技が一致するように工夫した。
4. 血圧に関する資料	2015年4月	オープンキャンパスの基礎分野の企画で使用使用する血圧に関する資料を作成した。対象は高校生とその家族となるため、一般的に使用されている言葉を用いて分かりやすくし、かつ武庫川女子大学看護学部へ入学してもっと詳しく学びたいと思ってもらえるように本学看護学部の特徴を加えて工夫して作成した。
5. 感染症予防・注意喚起のポスターとガイダンス資料	2015年～2016	季節性感染症についての予防方法や注意喚起のポスターを作成し、学内各所に掲示した。また、ガイダンス時に学内での予防接種の接種方法や罹患した際の手続き等について資料を作成し学生に説明を行った。
6. 採血のDVDの作成	2014年12月	基礎看護技術演習Ⅳ-2における採血（静脈血採取）の講義において、これまでに授業や演習で学習した無菌操作や注射器を扱う際の留意点、人を対象として採血を行う

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
7. 注射法に関する講義・演習資料	2014年12月	際の留意点を学生が視覚的に具体的にイメージできるように、自身が看護師役、他教員が患者役となり実際に説明しながら採血を実施しDVD教材を作成した。
8. 与薬に関する講義資料	2014年12月	基礎看護技術演習IV-2の科目で使用する講義・演習資料、確認テスト、試験問題を作成した。注射は、患者に侵襲を加える技術である。安全にかつ安楽に実施しなくてはならない。また、患者への安全に加えて実施する看護師の安全も考えなくてはならない。これには、正確な技術の実施のみならず薬理学・解剖生理学の知識が必須である。看護学生にとっては、総合的な知識と正確な実施が求められるため難しい科目である。事前課題を行うことで、授業を受ける前に学生自身で調べ、どのような知識が必要であるかを知った上で授業に臨み、授業中に答えあわせを行いながら進行することで、受身の授業とならず主体性を持って授業に臨める様に工夫した。また、要点を絞って講義演習において要点を繰り返し教えることで学生の記憶に残るように工夫した。
9. 点滴静脈内注射を受ける患者の看護	2014年12月	基礎看護技術演習IV-2の科目で使用する講義資料・試験問題を作成した。この項目は1年生後期に学習する。与薬は看護師として勤務する中で日常的に実施する援助であるが、医療事故の多い援助でもある。与薬における医療事故は患者さんの生命を脅かす重大な事故となることもある。実際に起こった医療事故の事例を用いて、正確に安全に実施する必要性とその方法、看護師の役割・責任を学生自身が考え理解することができるように工夫して作成した。
10. 検査時の看護技術に関する講義・演習資料	2014年11月	この科目は基礎看護IV-2において、1年生後期に学習する。点滴静脈内注射を受ける患者は多く、看護師として日常的に行う看護である。学生自身も病院実習で看護学生として経験することが多い。技術の手順を暗記するのではなく、根拠を考えることができるように、講義のみならず複数の事例をグループで検討しレポート作成をする演習形態をとり工夫した。
		基礎看護学IV-2の科目で使用する講義資料・演習資料・課題・確認テスト・試験問題を作成した。この科目は、1年生後期の診療の補助技術で学習する科目である。検査内容の正しい理解・検査時の看護師の役割を理解し、正確に実施することが必要となる科目であるため、学生自身が考え主体的に授業に臨み、知識を習得できるように、事前課題・授業時の学生の意見発表・演習の実施・確認テストの実施といった流れで授業・演習を構成し工夫した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 武庫川女子大学 学生委員	2015年4月1日～2017年4月30日	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 養護教諭専修免許	2011年3月31日	
2. 看護師免許	2009年4月13日	
3. 保健師免許	2009年4月13日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 兵庫県看護協会主催 再就業支援研修会	2015年9月～現在	再就業を考えている未就業看護職を対象とした、兵庫県看護協会が主催する再就業支援研修会にて、身体アセスメントと創傷ケアの講義・演習を実施している。
2. 武庫川女子大学サマースクール	2015年8月	武庫川女子大学サマースクールにて小学生を対象とし、手洗いの必要性と手洗い方法に関する健康教育を実施した。
3. オープンキャンパスでの実習室企画運営	2014年4月～現在	オープンキャンパス時に、高校生や保護者を対象として基礎看護学実習室で実施している、血圧測定体験、シュミレーションモデル（シムマン）を用いたデモンストレーション、実習室説明や白衣の着用体験を行っている。看護の基礎的な分野であるため、看護学部を目指したいと思ってもらえるよう、身近な話題から専門的な内容へと企画し、分かりやすい言葉で説明するようにしている。
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 膵切除術後のquality of life(QOL)の検討	単	2011年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻	本研究では、A大学医学部附属病院にて、膵頭十二指腸切除術 (PD)と膵体尾部切除術(DP)を施行された患者105名を対象として、一般的なQOLの尺度であるSF-36、癌患者を対象としたQOLの尺度であるFACT-G、消化管に関して特異的なQOL評価の尺度であるGI-QLIを用いて、自己記入方式にて調査を行いQOL評価を行った。調査時点は、術前、術後2週、6週、6ヶ月、1年、2年、3年に行った。結果より、PDに関して、術後2週・6週に身体・社会的に影響を受けQOLは低下するが、術後6ヶ月に術前と有意差がなくなるまで回復した。また、SF-36における国民標準値との比較では、身体・社会面において術後2週・6週に、QOLは国民標準値と比較し有意に低値を示すが、術後6ヶ月に有意差がなくなるまで回復した。また、『日常役割機能・身体』『日常役割機能・精神』は術前より低値を示し、身体・精神的な要因により術前より日常の活動に影響を及ぼしていた。DPに関して、SF-36・FACT-G・GIQOLの結果から、身体・社会面において術後2週にQOLは低下するが、術後6週に術前と有意差がなくなるまで回復し、また、身体的な術後急性期のQOL低下の回復がPDと比較し早期であることが分かった。SF-36における国民標準値との比較に関して、身体面で術後2週にQOLは国民標準値より有意に低値を示すが、術後6週に有意差がなくなるまで回復した。『日常役割機能・身体』『全体的健康感』『社会生活機能』『日常役割機能・精神』は術前から術後経過において国民標準値よりも低値を示しており、術前から健康感が低く、身体・精神的な要因により日常生活・社会生活に影響を及ぼすことが分かった。以上のことから、術式により差が生じるが、疾患・入院・治療により身体・精神・社会面に長期的な影響を及ぼしていることが明らかとなった。
3 学術論文				
1. Experiences of Nurses in the Process of Determining a Nursing Diagnosis and Needs for Applying a Nursing Diagnosis: Fostering Understanding to Support the Use of Nursing Diagnoses in Clinical Practice	共	2017年3月	Journal of Comprehensive Nursing Research and Care, 2017, 2: 107	Yasuko Kume, Harumi Yamaguchi <Abstract> This study illustrates through experiences of nurses while determining nursing diagnoses in terms of thought, behavior, and emotion. It demonstrates current issues in and the needs for support in the use of nursing diagnoses. Data were collected through conducting semi-structured interviews based on an interview guide concerning the experiences of nurses and their awareness of issues in the process of determining nursing diagnoses. Principal Results and Major Conclusions: Following ten categories were selected upon considering the experiences of nurses in determining nursing diagnoses from a thought perspective: [Comparison with defining characteristics], [Confirmation of defining characteristics, related factors, and definition], [Searching for potential nursing diagnoses from main symptoms and problems], [Considering nursing diagnosis from nursing intervention and outcome], [Patterned thinking relating to specific diagnoses], [Considering some temporary nursing diagnoses and monitoring progress], [Identification of multiple nursing diagnoses], [Comparison of some nursing diagnoses by picking potential diagnoses of defining characteristics or related factors, definition], [Integrating multiple nursing diagnoses], and [Avoiding nursing diagnosis decisions]. From the behavioral and emotional perspectives, emphasis was placed on [Confirming and reviewing with other staff to determine a diagnosis] and [Solo confirmation and review to decide on a nursing diagnosis]. These were found to be driven by: [Pressure to provide a nursing diagnosis], [Sense of burden over task load that goes with nursing diagnoses], [Anxiety when determining a nursing diagnosis], [Negative emotions towards nursing diagnoses], and [Decline of negative emotions towards nursing diagnoses]. Needs for nursing diagnosis application included [Needs for fostering understanding and learning of nursing diagnosis], [Needs for expanding the process of nursing diagnosis], [Needs for nursing

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				ing diagnosis and nursing intervention for patients in specific situations], [Needs for the application of an electronic health record system], and [Needs for thinking ability in applying nursing diagnosis], suggesting a need to foster understanding of nursing diagnoses and application of examples.
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 主観的指標による全身浴と手浴が及ぼすリラクゼーション作用の検証	共	2018年3月17日	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会	山口晴美、田丸朋子、片山恵、岩崎幸恵、清水佐知子、阿曾洋子 <概要> 全身浴と手浴に対するリラクゼーション作用を主観的指標（日本語版POMS2）を用いて検証することを目的とした。20歳の健康な女子大学生9名を被験者とし、実験は10分間のベッド上安静後、10分間の全身浴もしくは手浴を行い、その後60分間のベッド上安静としこの3時点で調査を行い評価した。結果より全身浴と手浴どちらも身体的な緊張が緩和され、ネガティブな気分が軽減したり疲労感が軽減したりとリラクゼーションへ導かれていることが考えられた。一方で、「疲労」については、手浴においては実施前と実施後、実施前と終了時で有意に低下したが、全身浴においては有意差を認めなかった。この結果から、全身浴と比べて手浴において、より疲労感が軽減する可能性が示唆された。
2. 上方移動援助時におけるベッドの高さと看護師の腰部負担との関係－TAMAツールを用いた分析－	共	2017年8月	日本看護研究学会第43回学術集会	田丸朋子、阿曾洋子、本田容子、山口晴美 <概要> 本研究は、看護師がベッド上の患者に対して行う上方移動援助時におけるベッドの高さと、看護師の腰部負担との関係を明らかにすることを目的とした。結果より、被験者の平均勤務年数は12年であり、全国の看護師の勤務経験年数の中央値とほぼ同様となった。次に、TAMAツール得点のP得点と総合得点に、ベッドの高さの違いで有意差があったが、M得点には差がなかった。ベッドが通常作業域内に患者が位置することで、看護師の姿勢の安定性が向上し負担の少ない援助姿勢をとることができるため、腰部負担の軽減につながったと考えられる。M得点に差がなかったのは、援助を二人で実施したり、スライディングシートを使用するといった、効率性を向上させるケースがいずれのベッドの高さの場合にも含まれていたためと考えられる。
3. 看護診断を決定する過程における看護師の感情と課題意識の臨床経験による特徴	共	2017年7月	第23回日本看護診断学会学術集会	山口晴美、久米弥寿子、富澤理恵 <概要> 本研究は、看護診断を決定する過程における看護師の感情と課題意識について、臨床経験による特徴を明らかにし、臨床経験に応じた組織的支援体制のあり方の検討への手がかりを得ることを目的とした。結果より看護診断の決定や不慣れな看護診断に対し臨床経験を問わず不安や負担感を抱いており理解が困難という課題意識へつながること、また看護診断への苦手意識は若手群で、使用に伴う抵抗感は年長群で見られ、学生時代の看護診断教育の有無等の教育背景の影響が推察された。臨床経験に応じた理解促進のための情報提供や、年長者への電子カルテシステム使用の支援、若手への効果的な学習機会の提供等、臨床経験を考慮した組織的なサポートシステムの構築が必要であることが考えられた。
4. 看護記録のメディア分析実態調査に基づく地域・施設特性による傾向とサポートニーズ（第一報）	共	2017年12月17日	第37回日本看護科学学会学術集会	久米 弥寿子、山口 晴美、富澤 理恵 <概要> 多種施設における看護記録のメディア分析として、質問紙調査により看護記録の媒体や記録方法・内容やサポートニーズを実態調査で明らかにしその結果に基づき記録に関する教育のあり方を検討した。看護記録の媒体・形式・内容について問う自作の質問紙調査票を作成し、厚生労働省平成26年医療施設（動態）調査の概況に基づき病床数別の病院・診療所・訪問看護センター等の割合で層化し、ランダムサンプリングにより対象施設を抽出した。回答は選択式を基本とした。記入は看護部門責任者に依頼した。本報では、東北・関東地方への配布（計456部）の調査報告を行った。首都圏を除いた調査のため地域差

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
5. 看護診断決定に関連した看護師の思考・行動・感情傾向と課題意識に対する改善策の検討	共	2016年8月	日本看護研究学会第42回学術集会	<p>は認められなかったと推察する。また様々な施設を対象とした調査を行ってみると看護過程を展開しない施設、クリティカルパス使用、看護診断を使用していない施設も多いことが明らかとなった。</p> <p>山口 晴美、久米 弥寿子、上田 記子、阿曾 洋子、片山 恵</p> <p><概要> 本研究では、看護診断の決定に関連した看護師の思考・行動・感情の傾向を明らかにし、看護診断を行う上での課題意識を抽出し、臨床現場に即した看護診断の活用のための改善策を検討した。結果より看護診断の決定に関連したパターン化された思考の傾向から、臨床現場では使用頻度の高い診断に対して経験に基づきパターン化して診断している状況が推察された。このパターン化された思考の傾向については、看護診断の理解の難しさや電子カルテシステム導入による思考の単純化といった看護師自身の課題意識も踏まえ、その実情を究明し、個々のニーズに合う学習機会の提供や、電子カルテシステムの改善等の効果的な看護診断の活用策を検討していく必要がある。</p>
6. 看護診断を決定する過程における看護師の志向・行動傾向の臨床経験年数による特徴	共	2016年12月	第36回日本看護科学学会学術集会	<p>上田 記子、久米 弥寿子、山口 晴美、富澤 理恵、片山 恵</p> <p><概要> 本研究では、1) 看護診断の決定に関連した看護師の経験内容について、その際の思考・行動・感情傾向の観点から明らかにし、2) 看護診断を行う上での課題意識を抽出し、3) これらの結果から実態に即した職場サポート体制を検討した。結果より、臨床現場では、必ずしも看護診断プロセスが段階的ステップではなく、経験的・直感的思考も含めながら展開しており、同僚間での意見交換や承認の機会が重視されていることが示された。また電子カルテ使用や情報共有のあり方等の課題があげられ、電子カルテの形式や使用法についての対策や終末期ケアと看護診断、不慣れな看護診断を活用するサポートの必要性が示唆された。</p>
7. 看護診断事例検討会における診断候補と疑問点の傾向に基づく看護診断研修における教育的サポートのあり方の検討	共	2015年8月	日本看護研究学会第41回学術集会	<p>久米 弥寿子、山口 晴美、上田 記子、阿曾 洋子</p> <p><概要> 本研究では、看護診断事例検討会であげられた看護診断候補及び疑問点やその他の事項について、検討会開催時期による傾向を明らかにすることにより、検討会の効果と課題を考察すると共に今後の教育的サポートのあり方を検討した。その結果、事例やグループ数は異なるが、参考値との比較で2期の診断候補数の割合が高く複数診断も多かった。また「臨床判断」に関する疑問は2期で多く、これより当初より幅広く看護診断を検討しているが最終的に絞りきれない状況があると推測される。一方、2期で「診断の根拠」の記述が見られ、「(特定しない)セルフケア不足」は無かった結果から、事例検討会継続により一部の診断に関する基礎知識の定着は推察される。「セルフケア不足」では、他の診断による介入を検討する傾向があることが判明した。</p>
8. 看護診断決定に関連した看護師の経験内容や課題意識に基づくサポート体制の検討	共	2015年12月	第35回日本看護科学学会学術集会	<p>久米 弥寿子、阿曾 洋子、片山 恵、上田 記子、谷口 千夏、山口 晴美</p> <p><概要> 看護診断の決定に関連した看護師の経験内容について、その際の思考・行動・感情傾向の観点から明らかにし、看護診断を行う上での課題意識を抽出した結果から、現状に即した職場のサポート体制を検討した。結果、臨床現場では看護診断プロセスが必ずしも段階的プロセスではなく、経験的・直感的思考も含めながら展開しており、同僚間での意見交換や承認の機会が重視されていることが示された。また、電子カルテ使用や情報共有のあり方等の課題があげられた。</p>
9. 膵切除術後のquality of life(QOL)の検討	共	2010年7月	第65回日本消化器外科学会総会	<p>柴山(山口) 晴美、梅下 浩司、武田 裕、和田 浩志、小林 省吾、丸橋 繁、江口 英利、種村 匡弘、永野 浩昭、森 正樹、土岐 裕一郎</p> <p>*ポスター優秀演題賞受賞</p> <p><概要> A大学医学部附属病院での膵頭十二指腸切除術(PD:53名)、膵体尾部切除術(DP:39名)施行患者に対し、術前から術後経時的にSF-36とFACT-Gを用いてQOLの変</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
				化の検討を行った。DPに関しては、開腹下切除術、腹腔鏡補助下切除術施行患者のQOL比較を行った。結果として、SF-36では、PDは術前と比較し術後2Wに「身体機能」「体の痛み」が有意に低下し、「身体機能」は術後6ヶ月に「体の痛み」は術後1年に術前と比較し有意差がなくなるまで回復した。DPは、術後2Wに「身体機能」「日常役割機能・身体」「体の痛み」が有意に低下した。膵切除術後のQOLは、術後急性期に低下し、術後6か月から1年にかけて回復する。また、DPでは術後急性期のQOLは開腹下より鏡視下の方が勝ることが示唆された。
3. 総説				
1. The Future State of Nursing Education in Japan with Respect to the Nursing Process and Nursing Records: Understanding the Current Needs and Suggestions for the Future.	共	2017年12月	Yasuko Kume, Rie Tomizawa, Harumi Yamaguchi (2017). Journal of Comprehensive Nursing Research and Care, Volume 2. 116.	
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 全身浴との比較による手浴が心身へ及ぼすリラクゼーション作用の検証	単	2016年4月	日本学術振興会	平成28年度 科学研究費（若手B：16K20738） 代表研究者
2. 看護過程・看護診断過程に関連するメディア・内容・送り手分析に基づく看護教育の検討	共	2015年	日本学術振興会	平成27年度 科学研究費（基盤研究C：15K11537） 分担研究者 （代表：久米弥寿子－武庫川女子大学）

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2017年4月～現在	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会 実行委員
2. 2016年7月～現在	看護診断学会
3. 2016年6月～現在	人間工学学会
4. 2016年10月～現在	日本人間工学看護人間工学部会
5. 2015年6月～現在	日本看護科学学会
6. 2015年3月～現在	日本健康医学学会
7. 2014年～2015年	お父さんのための育児セミナー 協力
8. 2014年～現在	日本看護技術学会
9. 2014年～現在	日本看護研究学会
10. 2007年10月～2008年9月	大阪大学大学院医学系研究科 子どものこころの分子統御機構研究センター 研究支援員